

青山学院草創期におけるキリスト教女子教育をめぐる一考察 —「海岸女学校」卒業生松本英子にみる新しい女性の生き方を中心に—

小林 瑞乃

《要旨》

本稿は、1876年（明治9年）に米国女性宣教師ドーラ・スクーンメーカーによって設立された「海岸女学校」（青山女学院の源流）で学んだ松本英子（永井あいき）の人生を軸に、キリスト教女子教育をめぐる今日的意義を考察するものである。

松本英子は、当時の最高レベルの女子教育を修得し、教師としてまたバイブル・ウーマン（クリスチャン・ワーカー）として熱心に活動し、貧困層の子どもの教育に意を注ぎ、さらに新聞記者として足尾鋇毒問題に全力で取り組み、晩年まで非戦・平和論を主張するなど、少数者としての生き方を貫いていた。

英子の原点である海岸女学校の教育内容は、女性宣教師の学んだフィーメール・セミナリーをモデルに、男子の教育に比肩するハイレベルなものであった。海岸女学校から青山女学院に至る教育の目的は、品格あるクリスチャン・ホームの主婦、教師、クリスチャン奉仕者の育成にあった。

この教育理念は女性の可能性や能力を引き出し女性解放の基盤となる側面と、女性の自由な生き方を家庭へと拘束する側面という両義性を内在しつつ、教養主義という教育理念として継承されていったのだと考えられる。

当時の男尊女卑の日本社会では、女性であり、キリスト教徒であり、新聞記者として社会問題の解決を目指すことはすべて逆風にさらされる要因となった。そのように自身を取り巻く被拘束性の中で生きた英子の生涯は、良妻賢母型とは異なる生き方を示している。英子は、メソジスト派のミッションが牽引した女子教育に学び、その奉仕の精神と教育を体現しつつ、一身の生を存分に生きた女性の一人であった。

キーワード：女子教育、キリスト教、ミッション・スクール、良妻賢母、松本英子、永井あいき、ドーラ・E・スクーンメーカー、青山学院、青山女学院

はじめに

本稿では、明治期に米国女性宣教師ドーラ・スクーンメーカーによって設立された「海岸女学校」の初期の卒業生である松本英子（永井あいき）を取り上げ、キリスト教女子教

育の影響とその人生形成をめぐる今日的意義を考察するものである。

スクーンメーカーは1874年（明治7）10月に来日、11月16日に居留地外の麻布本村町の空き家（岡田平蔵宅）の一室を借りて「女子小学校」を始めた。女子のための学校設立・伝道が目的であったが日本語力に乏しい彼女は、まず英語教室を看板として寺子屋のように小さな教室から始めたのである⁽¹⁾。

女子小学校は1875年に「救世学校」と改称し、翌1876年に「海岸女学校」として発展し、さらに1888年に上級生28名を移し「東京英和女学校」として青山に移転。1894年震災で全壊した海岸女学校が東京英和女学校に合同して翌年「青山女学院」が設立され、青山学院の源流の一角として確固たる地歩を築いていった⁽²⁾。

以下、まず松本英子の歩みを追ひ、次に「海岸女学校」における教育内容やその背景などを確認しつつ、卒業後の足跡にみる女子教育の理念や信仰の在り様、そこから見えてくる諸課題などを検討していきたい。

1 松本英子の生涯

(1) キリスト教女子教育～スクーンメーカーとの出会い～

松本英子（永井あゐ子、以下英子と記す）は、1866（慶応2）年、農家出身の漢学者で学塾を営む松本貞樹とその後妻なほの一人娘として千葉県望田陀郡茅野（現在の木更津市）に生まれた⁽³⁾。我が子に天賦の才を見出した父の英才教育を受けて育ち、幼少より神童の誉れ高く、1872年6歳の時に千葉県庁に呼ばれて見事な墨書揮毫を披露して称賛され、8歳で一流書家と比べても遜色ない腕前であった。父は佐幕派の人物で義侠心熱く、中村敬宇や勝海舟などとも交流があった。撰文中村、題字が勝による「松本翁寿蔵碑」が郷里に建立され、貞樹の業績を讃えている。

学制が布告されると父は家塾を閉じて一家で東京に移り、麻布三の橋の通称古川端の津田仙方に居住した。ここから英子が通学したのが、1875（明治8）年に父の友人である津田が開校に尽力したドーラ・スクーンメーカーの「救世学校」である。津田の長男元親、長女琴子、岩村千代、岩崎つね、遠藤りう等と共にスクーンメーカーから英語を教わった。最年長は津田琴子で、英子が最年少であった（75年に在学であれば9歳）。一家で上京した意図については不明だが、その後の英子の歩みから見ると、両親の行動は人並外れた能力を持つ英子の将来をキリスト教女子教育に委ねたことに等しかった。

「海岸女学校」となって以後も英子はここで女子教育を受けながら、日本語の拙い宣教師を補佐し、生徒ながら漢文などの教師も兼ねて働いて約9年間在籍した。

英子と共に学んだ田村（粟屋）栄子、米良（元良）米、岩村（小崎）千代らは、英子が一番年少だったが漢学は既に十分素養があり、どの教科も一人群を抜いていたと、神童といわれたその非凡さについて口をそろえて証言している。特に和歌に堪能で、筆跡も見事で、米良は習字の後の残りの寸紙に英子が走り書きしたものを先生からもらい受けて大切

に保管していた⁽⁴⁾。

海岸女学校の生徒であった小池實太郎の妻はま子は、職員としての英子を記憶していた。

私の入学したのは13歳の時、即ち明治17年で、同女学校が出来てから既に数年の後ちでした。生徒は7～80人居りました。此時は松本おゑいさんは職員の一人で、たしか英語の訳読を教えて居られたと思います。そして一方は生徒として何か勉強して居られました。私はおゑいさんから日曜学校でバイブルを教わりましたが、普通の日には何も教わりませんでした。おゑいさんは年の若かったに似合わず、熱心な基督教信者で又何んでもよく出来た方でしたから学校全体から尊敬されて居られました。⁽⁵⁾

1885（明治18）年に海岸女学校を卒業すると、四谷教会のバイブル・ウーマンとして伝道生活に専念した。バイブル・ウーマンは「婦人伝道師の先駆けとして各地で活躍」して牧師への道を開き、米国女性宣教師のミッション・スクールで「教育を受け、宣教師によって学業と信仰が優れたものが選ばれた」のであった⁽⁶⁾。

英子は後に当時を回顧して「どんな所へでも訪問し、熱心にキリスト教を説き、大山伯爵夫人の所などには屢々往ったことがある」と語っていた⁽⁷⁾。

またこの頃の英子について、次のような証言がある。

私の初めておゑいさんにお目にかかったのは1885年（明治18年）で、私が東京の四谷教会で英語の聖書科を受け持って居た時、日曜毎におゑいさんにお目にかゝりました。当時おゑいさんは若く快活で、同教会バイブル・ウーマンとしてミス・ホルブルック女子と共に伝道方面に働き、教会のために立派な仕事をして下さいました。ドクトル・デヴィソン氏が讃美歌翻訳委員に挙げられてから、天性詩歌音楽の愛好家たるおゑいさんの助けによって其翻訳を完成させました。若しおゑいさんの尽力がなかったなら日本訳讃美歌の土台を築くことは出来なかったでしょう。⁽⁸⁾

こうして十代の英子は生徒として学び教師として教え、讃美歌編纂やバイブル・ウーマンとしての活動など、奉仕に捧げた日々を送っていたのである。

（2）讃美歌編纂への従事

キリスト教への英子の献身の中で特筆すべきことの一つは先述の讃美歌編纂であり、「日本讃美歌発達史上の一功労者」というにふさわしい仕事であった⁽⁹⁾。

1883（明治16）年、讃美歌編纂者のデヴィソンは共に編纂する日本人を探していた。デヴィソンは以前から神童として英子のことは知っていたが、津田の紹介によって英子はこの仕事を引き受け、共同で翻訳・編集の作業に務めた。報酬が無いため、その間はバイブ

ル・スクールの聖經学校で英語を教えながら讃美歌翻訳に従事した。翌1884年、日本語による初の讃美歌集『譜附基督教聖歌集』が刊行された。“不朽の名句”とされる「あまつましみづ ながれきて」(聖歌150番)に見るその美しい表現は、17歳の彼女の知性と感性の結晶といえるだろう。

讃美歌を翻訳する苦心について、後年英子は以下のように語っている。

英語の楽譜に日本語を当てはめることは容易のことでは有りませんでした。原詩の調子の高き所は日本語も強き言葉を用ひ、低き所には弱き言葉を用ひ、又重々しい所には之に応じた日本語を用ひねばなりません。又英語の歌句の長短により日本語の方も同様に調節せねばなりません。原詩の大体の意味、即ち悲喜慶弔等の場合によって、それぞれ之に適応した字句を選ばなければなりません。(中略)

斯くして、数句を得て、一つの歌が出来上がった時、更に之を歌い且つ楽器に合せて、原歌の真意とその歌調とに合うか否かをためして見るのでした。そして尚不満足の間があれば又やり返して見るのです。それだから、翻訳の修正、字句の改良等になか／＼手間取りました。然し兩人の心組は真剣でした。此讃美歌は将来幾十万の人に誦まれ、記憶され、人の感情上に多大の影響を及ぼすのである。之は容易の仕事ではないと云ふ責任感に充ち満ちてゐました。⁽¹⁰⁾

こうして、単に語学力だけでなく日本語の響きや美しさ、文学的素養、音楽的な感覚も必要で大変骨の折れる重責ある仕事を成し遂げたのであった。

数年後の1893年、さらに改訂増補することになり、デヴィソンは再び英子の助力を願った。健康が優れなかったが英子はこれに尽力し、聖歌集の全部を原詩と対照して加筆修正し、新たに百篇ほど作り加えた。二年がかりで完成したものが1895年(明治28年)刊行の『基督教聖歌集』である。委員は多数いたが実際に作業したのはデヴィソンと英子であったという。だが、1900年(明治33年)4月大阪で開催された福音同盟会は満場一致で各教派共同の讃美歌編纂を決定し、秋からその作業が開始された。メソジスト派は増補改訂本が出来て間もなかったために当初は加わらなかったが翌年参加し、各派からの多数の委員の協力によって1903年(明治36年)10月に完成したものが『さんびか』であった。こうした経緯があって、「今日之を繙といて其歌詞中のいづれがゑい子女子の作であり、若くは其改訂であるかを挙証することは却々困難だ。又よしんば出来るにしたところで煩にたえない」という状況になってしまったのである。

その中にあって、英子作の原型がほぼ残されているものについても証言されている。例えば「あまつましみづ ながれきて」(明治17年『聖歌集』第150、『さんびか』第174)は「翻訳でなく全然創作で、殆んど原形のまま残されてゐる。曲調もよいが、歌詞の美しきこと讃美歌中屈指のもので、従って普ねく信徒間に愛誦さるるの名歌の一つである」⁽¹¹⁾。また「はるのあさけ」(明治17年『聖歌集』、『さんびか』第427番)は「之こそ人口に最も

膾炙せる讃美歌と云ってよいかも知れ」ず、その改定は僅かで、「美しい、そして調子の非常によい歌詞」で「のんびりとした渋滞なき歌詞の中には女史の豊かなる詩藻が心地よく顯われて」いると評されている⁽¹²⁾。

讃美歌の日本語訳は明治の翻訳文学の脈絡からも貴重なものであり、参照すべきものがない新しい挑戦であったこと、日本人に聞きなれない西洋音楽に合わせなければならなかったこと、日本人に西洋文化や生活習慣への理解のなかった当時にあつては直訳ではわからないため日本的に書き改めねばならなかったことなど、多くの苦心が重ねられていたのであった⁽¹³⁾。

(3) 女学校の教師として

英子は1886年女子高等師範学校の新官制が出来ると知ると、当時の女子の最高学府東京師範学校女子部（のち東京女子師範学校、お茶の水女子大の前身）に進学した。ここでも助教授兼学生の立場で過ごし、米国女性教師の通訳や日常の世話までしながら自分の学科にも出席した。

在学中、シェークスピア『リチャード三世の悲劇』の上演が企画されると選ばれてエドワード四世の後エリザベスを演じ賞賛された。相手役の東京帝国大学代表は、後に駐米大使館一等書記官、中国公使、在ドイツ特命全権大使を歴任する日置益であった。

過労のために病臥するような日々を送りながら1890（明治23）年に24歳で卒業すると、下田歌子の華族女学校で英語と家政を教え、1891年10月の濃尾大地震に際しては義援金活動に奔走した。

1892（明治25）年〔26歳〕外務省翻訳官・哲学博士の家永豊吉と結婚し、1895年に長男勝之助が誕生するが家庭生活は長くは続かず、1897年〔31歳〕、婚家破産により離婚した英子は勝之助とも離別しなければならず⁽¹⁴⁾、1898年からは華族女学校や実践女学校の教員として生計を立てた。

華族女学校の教え子の中には上流階級の妻となった者も多く、また夫の赴任先の米国で英子と再会した女性たちがいた。この頃の英子について、日米新聞社社長の妻安孫子よな子は家政科で英子から西洋料理を学んだことがあるといい、またサンフランシスコ博信社社員西本良弼の妻八重子は家庭教師として英語のプライベートレッスンを受けたという⁽¹⁵⁾。華族女学校の最後の卒業生で、ハリウッド活動写真界で成功した上山草人の妻三田千枝子（山川浦路）は、英子について次のように語っている。

先生は学校の高等と初等中学との英語を受持ってお出で、私共は先生について二年間に、「小公子」と沙翁〔シェイクスピア：引用者注〕の「ヴェニスの商人」とを教ったことを覚えております。先生は何時もキチンと白羽二重のゑりを合せて、濃い茶のカシミアの袴を胸高にはいてゐらっしゃいました。お召物のお好みも一体に地味でした。そして非常にきょうめんな方で、英習字の時にインキ壺の位置が悪いと一々直して下さいました。⁽¹⁶⁾

海岸女学校の初期の生徒の一人である岩崎（新井）常は、スカーンメーカーが華美なドレスを身に付けることなく常に更紗（木綿）の服だった質素さに感銘を受けたと回想しているが⁽¹⁷⁾、2人が共に質素な出で立ちの熱心な教師として生徒の印象に残っていたことは興味深い。三田は、サンフランシスコで再会したのをきっかけに、英子がかつての教え子に茶菓の贈り物をするなど愛情深く接したエピソードなども語っている。

（4）新聞記者としての取り組み

1901年頃、英子は津田仙の紹介でクリスチヤンの島田三郎が社長である毎日新聞社に入社し、以来草創期の数少ない女性の新聞記者となった。当初は「日本女子大学参観の記」や「女ならでは」など女性をめぐる記事を書いている。また、日清・日露戦間期に勃興する資本主義下の凄まじい貧富の格差が進行する状況の中で貧民窟と呼ばれたスラム街取材し、貧困層の子どもの問題に取り組み奉仕活動も担った。

例えば、英子の参加した時事新報主催の「慈善旅行」は、東京の三大貧民窟と呼ばれた地域の児童を集め、監督者が引率して鎌倉に数日間清遊させるという企画であった。1900年（明治33年）の春期第1回の旅行では男児ばかりであったが、8月5日の夏期第2回には女児60名を引率することになり、主任潮田千勢子、事務長白井俊一、総監督小室篤次、そして教員5名のうちの1人が英子であった。英子は旅行のために「慈善旅行」の歌を2つ作ったが、それは「鉄道唱歌」と「小楠公」の唱歌に合わせた替え歌で、それを歌って子どもたちは大いに盛り上がったという⁽¹⁸⁾。

この頃の執筆と思われる、貧困家庭の児童のための教育機関設立を訴える「貧児の為」⁽¹⁹⁾という文章があるが、その内容からは、慈善事業だけでなくより長期的な展望に立った教育的措置が必要だと考えていたことがわかる。

1901（明治34）年11月に足尾鉍毒被害地を視察して以降は鉍毒問題糾明に尽力し、「我都下の姉妹助けよ！ 同胞先ず彼地の実況を目撃して其惨状を見よ！」「我等の力が許さん限り此無告の民の為江湖有志者の同情に訴えようと思うのである」（「鉍毒地の惨状（四）」『毎日新聞』11月25日）と、広く世間に訴えていった。12月7日には鉍毒地婦人救済会が発足し、演説会をはじめ、義援金募集や援助、被害地の病人を上京させての治療、少女達の教育が取り組まれる。英子は度々被災地を探訪して慰問と聞き取り調査を行い、みどり子のペンネームでその現状を59回にわたって『毎日新聞』に連載した。記事の反響は大きく、世論は盛り上がった⁽²⁰⁾。

鉍毒被害地を視察する潮田千勢子と英子らを案内した永島与八によれば、当時妻が産褥熱の重態で、それを心配した英子はすぐに帰宅して看護すること、医師を変えるように勧めたという。「其の熱誠罩めての御注意に心を動かされて帰宅した」永島のところに、さらに遠方から関根東之亮という医師が訪ねて来た。「此の関根氏はクリスチヤンでもあり、極めて親切なる医師で三里半の道を早速来て診察してくれた」。そのおかげで妻は一命をとりとめ、夫婦にとって英子は命の恩人として忘れる事ができなかったという⁽²¹⁾。英子

の人柄とともに、当時のクリスチアンのネットワークの在り様が伺えるエピソードである。

同年12月、田中正造の直訴によって輿論は更に喚起され、学生達の鉱毒地視察も盛んとなった。翌1902（明治35）年1月17日、鉱毒地救済婦人会が国会議員に配布した檄文「貴衆両院議員諸君に檄す」は英子の執筆といわれ、政府と社会の罪を問い、被害民救済への支援を訴えていた。

足尾鉱毒問題の声は今や天下を動かせり（中略）嗚呼此問題たる渡良瀬沿岸四県三十万の人民過去廿年余の歲月之れが為に慟し之が為に哭するも世は之れを不視不問に附し去れり 嗚呼之れ何等の大罪ぞや 嗟に一個人一政府の大罪たるのみならず又社会の罪と云わずして何ぞ 社会の腐敗と云わずして何ぞ 社会墮落の極点と云わずして何ぞ（後略）

『毎日新聞』は1月以降鉱山停止論の立場を鮮明にし、連日のように演説会の広告と報告記事を掲載するなど沸き立つ世論に訴えて政府との対立姿勢を強めた。1月31日、文部省から全国各学校長宛鉱毒地個人視察の禁止命令が出され、2月には潮田と英子が警察に召喚され取り調べを受けた。明治政府は弾圧を強化しつつ、同年3月鉱毒問題調査委員会を設置した。

4月、英子の連載記事などをまとめたルポルタージュ『鉱毒地の惨状』が教文館より出版された。新聞社を退職した英子は、同年11月横浜から単身渡米する。その行動には日本への深い絶望を感じさせられる。

（5）アメリカでの後半生

だが、アメリカでの英子は一層バイタリティーにあふれていた⁽²²⁾。放浪中に知り合った米国女性に声をかけられ共同生活を送り、1905（明治38）年セントルイス万国博では売り子として商品を売りさばいて大成功させ、振り袖姿の「タマ・イデ」（井出玉子）として日本文化を語った講演会は好評を博して新聞で報じられた。翌1906（明治39）年1月、サンフランシスコで知り合った元新聞記者で保険代理店を営んでいた永井元と再婚した。永井には、上毛青年会で廃娼運動に参加した経験があった⁽²³⁾。

同年4月サンフランシスコ大地震で被災すると夫妻は救済委員会を立ち上げて多くの日系避難民のために奔走した。また、日本人の子どものために教会で夏期学校を開くなど、その活動には、どこにあっても奉仕の精神が息づいている。

1906年7月〔40歳〕、英子は元の勧めでカリフォルニア大学バークレー校の夏季講習に通い、英文学やフランス語講座などを受講し、9月からは特科生として入学してロマンス語学科でフランス語やスペイン語などを学んだ。周囲が驚嘆して「ザ・スカラー」と呼ぶほどに優秀で、1910（明治43）年には105以上の卒業要件を満たす単位を取得していた。その後、本科生としてスタンフォード大学で学んだが体調を崩して中止し、翌年単位継続制

度のあるパシフィック大学に入学し、1912（明治45／大正元）〔46歳〕、バachelor（学士）及びマスター・オブ・アーツ（文科修士）の学位を授与され卒業した。共学の大学に通い、修士号を取得するほど勉学に励むことは、女性の大学進学に難色を示していた日本ではほとんど不可能なことであった⁽²⁴⁾。

以後は元と二人三脚で保険業に専念し、驚異的な成功を収めていく。文才を宣伝・広告に生かしてダイレクトメールで勧誘するなど当時として極めて画期的な手法で新規契約者を獲得し、全米保険代理店チェーンの中で高額契約成功者「20万ドルクラブメンバー」に選ばれる榮譽を受け続けた。こうして、ビジネスの上でもその才能を発揮したのであった。

その傍ら、『在米婦人新報』に論説などを執筆し、排日運動が次第に激しくなっていくアメリカにあって、キリスト教徒としてまた日本人としての矜持を説き、世界同胞主義、平和論や非戦主義の理想を掲げた。日清・日露戦争下の日本、さらに第一次世界大戦時のアメリカを知る英子は、1918（大正7）年に『在米婦人新報』紙上に「嗚呼戦争」「軍国の婦人」などを発表し、1926年「如何にして戦争を世界より消滅せしめんか」、1927（昭和2）年には論説「非戦のために戦へ」など非戦論を書き続けていた。

1923（大正12）年頃からは読書三昧の生活を送り、フランス語原典でヴォルテール、ルソー、フローベール、モーパッサン、バルザックなどの全集を一心不乱に読破した。この頃から病魔に侵され生活は不自由となり、外出も出来なくなる。かつてのフランス語の師エドモンド・ラアシャと再会して再びフランス語を習うようになり、この人物から教えられた「クリスチャン・サイエンス」に傾倒して医療は受けず、死の直前までエミール・ゾラを読み進めていった。元は1926（大正15／昭和元）年頃から英子の看病だけに全てを捧げ、1928（昭和3）年4月、サンフランシスコの自宅で夫に看取られ62年の生涯を終えた。死因は卵巣がんだった。

2 海岸女学校の教育と背景

英子の生涯を概観するとき、その原点として「海岸女学校」は重要な意義を持つ。そこでここでは、海岸女学校の教育的な内容について確認していきたい。

前述のようにスクーンメーカーは1874年（明治7）11月16日に「女子小学校」を開き、英語教室から始めたのだが英語を教えるだけでは伝道は難しく、他の宣教師たちと同様「第二の戦略」として「寄宿学校の設立」を企図した。生徒にキリスト教を教えても自宅や周囲の環境によって日本的価値意識に引き戻されてしまうため、英語は学ばせても「洗礼には反対する親が」多く、宣教師らの共通の悩みである「せっかく期待をかけて育んだ優秀な生徒を失うという苦い経験をして」いたのである⁽²⁵⁾。

そこで三田北寺町にあった真言宗の大聖院を借りて「救世学校」を開校し、寄宿生7人と通学者18人を教えた⁽²⁶⁾。ここを寄宿学校としてアメリカ式のマナーや生活様式を学ばせ、生活と共に英会話を教え、信頼関係を築いていった⁽²⁷⁾。

様々な困難を経る中、1876年9月に WFMS - MEC のニューヨーク支部から派遣されたオリーヴ・ホワイティング〔29歳〕が日本に到着し、同年12月築地の外国人居留地10番に「東京ホーム」と呼ばれた海岸女学校の校舎が完成し、翌1877年1月に開校した。十分な資金も無い状況で悪戦苦闘する2年余りの間に、学校建築費用と宣教師補充を本部に必死に求めた結果、1877年5月の総実行委員会で、大幅に予算が増額された。そのきっかけは、1876年4月の四人の少女新井常、津田琴子、岩村千代、水島絲の受洗であった。

ドーラを送り出したノースウェスタン支部は当然のことながら、ドーラの給料と諸経費、日本語の個人教授代の他、生徒四人分の奨学金を出し、ホワイティングを派遣したニューヨーク支部は彼女の給料と二人のバイブル・ウーマン（日本人の伝道補助要員）の給料を負担している。特筆すべきは、ウェスタン支部で、築地の地代、寮母、料理人などの職員の使用料、光熱費、バイブル・ウーマンの費用と伝道旅費、日本人教師の給料など総額900ドル余りを予算化しただけでなく、建物の増築代二千ドルの支援を約束した。⁽²⁸⁾

築地居留地への移転・開校によって生徒数が一時半減したこともあり、新聞で生徒募集を広告した。その宣伝文では、従来から人気の英語と漢学に裁縫と洋楽（オルガン）を加え学則を改正して9月3日から開学すること、14歳以下の男児の通学を許可する事、貧困で修学意欲のある女兒には「月謝月俸ハ勿論衣類等迄を授与」すると記載されていた（『朝野新聞』8月26日～9月4日の間に7回掲載）。

キリスト教教育には触れず、英語ブームなど生徒や親のニーズへの配慮などが功を奏し、「やがて40人余り（うち寄宿生30人）の生徒を抱える学校になった」⁽²⁹⁾。

海岸女学校の同窓生の田村（栗屋）栄子は、在学していた竹橋女学校では英語の時間が少ないので物足りないと思っていたところに新聞広告を見て「早速父の許しを受けて入学」したという⁽³⁰⁾。別の回顧談では、次のように少しニュアンスが異なっている⁽³¹⁾。

私は当時高等官吏の子女等のために特に設けられた竹橋女学校、丁度後ちに学習院と云った様な学校に往って居りました。父は最も進歩的な人でしたから、之からの人は英語を学ばなければいけないと云って居る所へ、丁度或る日刊新聞を見ますと、其広告に、海岸女学校と云う少女の為めの学校が初めて出来て、其処で生徒を募集し、其教科目には英語、会話、作文、訳読を初め、外国の礼儀作法より西洋料理法、漢学、数学をも教え、米国婦人教師数名が教授を担当すと云うことが書いてありましたので、父は私を前の学校から退学させて、此海岸女学校に出席致す様にさせました。

このように田村親子にとって、海岸女学校への転校の決め手となったのは英語教育にあった。田村が入学したのは明治9年の下半期で、12年まで在学した。救世学校から移ってきた先輩の生徒として岩村千代、元良米、英子、伊勢みや（のち海老名弾正と結婚）、

中山りう、広瀬ふく（姉がのちに文部大臣森有礼の妻となる）、宮崎けいろくなど、40人程であったという。

また田村の記憶によれば、米国女性の教師は4名で、スクーンメーカーは地理、ホワイティングはリーダー（ウィルソン読本か）、スペンサーはオルガン、ホルブルックからは英会話を教わった。ホルブルックは日曜日にはバイブル・クラスを持っていた。漢学で『蒙求』を教えた高津柏樹先生は面白い人で、滑稽な話をして始終笑わせ、手塚先生から『十八史略』や『日本外史』を、小島春先生からは習字を、吉松りうからは通訳を、岩崎先生・森脇先生には裁縫や西洋料理を教わり、「一通り女子に必要な学科は皆教えて居りました」。

田村の方が一つ年上だが英子と仲が良く、或る冬の朝、生徒から嫌がられていた数学の岩崎先生にいたずらをして、2人で雪のかたまりを先生の襟の中に入れて困らせたといった思い出も語られている。

漢学を教えた高津はのちに黄檗派本山の管長となる人物であるが、英子自身もよく記憶しており、非常に可愛がられて寄宿舎からいろいろな所に連れて出かけたという⁽³²⁾。

創立当初からの生徒達について、入学者の傾向としては、「進歩的上流家庭の子女」「先駆的入信家庭の子女」「宣教師が各地の伝道先からともないきたったもの」「自らの意志によって自発的に入学したもの」であり、「何らかの機縁で、自覚して入学したものには堅固な意志、強い向学心、優れた頭脳の持主がとくに多かった」とされている⁽³³⁾。

始業前の礼拝で始まる海岸女学校の日と一週間のスケジュールは、次のようなものであった。

午前中は日本人教師による日本学課で日本人の教師陣（高津柏樹、手島新、小島春）によって国語、漢文、数学、裁縫が教えられた。午後がドーラとホワイティングによる英語学課で、英語の祈りに続いて英語、地理、歴史、物理が教えられた。生徒たちには鉛筆やノートといったものはなく、石板と石筆を使った。金曜日には、午前中が聖書の暗唱と『メソジスト教会問答』を使って教理教育がされた。世界の創造から始まり、最後の審判に至るまでの112項目の信仰問答を生徒たちは一字一句暗唱させられた。午後には英習字と編み物のクラスがあった。土曜日は休みで、生徒たちは日曜日に備えて髪を洗い、お互いに結い合った。日曜日午前中には、隣の11番にある教会で礼拝、午後には海岸女学校の校舎で日曜学校があったという。生活面では時間厳守や清潔について厳しく躾がされた。ドーラとホワイティングの他に「取り締まりの先生」という日本人の寮監もいて、日本人女性として恥ずかしくないよう教育された。⁽³⁴⁾

築地の外国人住宅で一番広い邸宅がこの学校で、2階が30人程度の寄宿所、1階が教室、庭が運動場となっており、ブランコや簡単な運動器具が備え付けられていた⁽³⁵⁾。校舎は西洋風でも「中は畳敷きであって、生徒たちは午前中には寺小屋風に小さな机の前で正座

し、午後には机を片付けて、『デスク』を持ち出し椅子に座って英語を学んだ。「日本人としての国語教育、国際人としての英語教育、キリスト教による宗教教育の三つをバランスの取れたものにすることを心得て」おり、生徒たちの試験が公開されていた。「福沢諭吉も訪れたことがあるという公開の試験では、生徒の学習成果が測られるだけでなく、教師の教授能力をも測るので、自信のない教師にはできないこと」で、スクーンメーカーの校長としての自信を物語っていた⁽³⁶⁾。

海岸女学校の履修科目を概観すると、英語・和漢学・数学・地理・歴史・天文・博物・動物・地質・物理・化学・生理・衛生・倫理・心理・経済・政治・教育・画法・聖書・裁縫・割烹・作法などであった。他校と比較すると、当時の一仏教系女学校では7科目、国粹的女子教育の一女学校は9科目であったことと比べれば一目瞭然だが、25科目以上の科目のある海岸女学校の「教授科目は多彩」で「非常にアカデミック」であり、使用された教科書も男子中学校並みのハイレベルなものであった⁽³⁷⁾。

海岸女学校で使用されていた教科書は、和漢学を除いて、大半がアメリカの教科書であった。例えば、バーンズやサージェントの英語読本、スイントンの修辞学、カールの英語文法作文書、コーネルの地理書、グードリッチの米国史、ディケンズの英国史、パーレーの万国史、ロビンソンの代数、ユーマンの植物学、テンネースの金石学、スチールの人身生理学・物理学・化学・天文学・ウェーランドの倫理学・心理学、ピンネーの倫理学などが用いられた。この中で、コーネル、グードリッチ、パーレー、ウェーランドの著書は、福沢諭吉が幕末に渡米した際、ニューヨークで大量に買い求めた教科書の一部でもあり、海岸女学校の教育水準は、慶應義塾をはじめとする男子中等学校と比べても、遜色のないものであったといえる。

プロテスタント系の女性宣教師による女学校は19世紀に発展したアメリカの女子中等教育機関フィーメール・セミナリーをモデルとすることが指摘されているが、海岸女学校でも同様であった。フィーメール・セミナリーの目標は「敬虔にして教養高い家庭婦人の育成、女性教師と女性宣教師の養成」で、一般教養を重視し、特に「科学諸科目が、カリキュラムの中核を占めていたことが特徴」で、海岸女学校でも見られる特徴であった。その他、卒業資格を厳しく制限していたこと、健康や衛生の重視、家庭的な共同体を創出することを意図して設計された寄宿制の建築様式など、「女学校の創設期に活躍した女性宣教師の多くは、フィーメール・セミナリーでの自らの経験を生かす形で、日本での女子教育の基礎を築き上げていった」のである⁽³⁸⁾。

3 「女子教育」の理念をめぐる

それでは、「女子教育」を目標に掲げ伝道と一体化した教育は、生徒をどのように育て、

生徒はどのように受け止めたのだろうか。ここでは、その点を考えていきたい。

棚村は岩村（小崎）千代に注目して、その意義について論究している。千代が73歳の時のスピーチについて、そこで語られた「今日まで神の御導の許に、私はよき女、よき妻、よき母、よき主婦になりたいと、いつも心掛けて参りました」という努力目標は「夫に仕える儒教的な意味ではなく、スクーンメーカーから教えられたように、日曜日の礼拝を欠かさず、神を第一に考えるキリスト教的良妻賢母」であるとする。そして、「家庭の円満を通して『日本の國を立派にして行きたいものでございます。日本の國を立派にすることは、世界を平和に導くことでございます。そして其の根本は、何處までも神に縋り、私共の心の戦に勝つことでございます。この根本が立たねば、何時迄経っても、本当の平和、本当の満足は得られません』と主張している」と論じ、次のように結論づけている⁽³⁹⁾。

WFMS-MEC のイデオログであったウィリング夫人は、世界を神の国へと導く為に、まず女性に伝道し、女性の感化で家庭や社会にキリスト教が広まり、社会が浄化され、真の神の国が来ると確信していた。ウィリングからドーラへ、ドーラから千代へと海を越えてその論理が伝達されているのが分かる。（中略）千代は家庭に閉じこもる「奥様」ではなく積極的に社会に働きかけ、社会を変えていこうという活発な女性であった。

千代は教師になるのが夢だったが、スクーンメーカーから託されたスポンサーに説得されていた⁽⁴⁰⁾。ようやく決心して、『六合雑誌』を創刊し霊南坂教会を創立する小崎弘道と結婚して夫を支え、教会だけでなく矯風会、青山女学院校友会会長として指導的立場に立った。1921年にはニューヨーク世界宣教会議、ボストンアメリカン・ボード第112回年会などに出席のため渡米。ワシントン世界軍縮会議には矢島楫子〔90歳〕とともに夫妻で出席し、日本女性の代表として報告したのであった⁽⁴¹⁾。

棚村は、千代の中に受け継がれているとするウィリングの理念のユニークさについて、女子教育における第三の立場として次のように論じている。

女性を「家庭」という領域においてのみ影響力を発揮させようとする「家庭の為の女子教育」でもなく、女性の自立の為に男性と同様の平等と権利を強調するスタントンらの「自立のための女子教育」とも異なるウィリング流の第三の立場は、名付けるとすれば「神の国の為の女子教育」となるであろう。⁽⁴²⁾

次のように描かれるウィリングの言説からは、ジェンダーフリーな指向性をも感じさせられる。

（アメリカ家政学のバイオニアとされる：引用者注）キャサリン・ビーチャーらが「女らしさ」の徳として挙げた純潔・敬虔・自己犠牲・家庭性の徳目をウィリングは男性にも

必要であるとする一方、強さや勇気、独立心といった男性に期待される「男らしさ」を女性にも求めるべきだとしている。考えてみれば、海外宣教に独身の女性を送るという WFMS-MEC などの試みは、それ自体、ある意味では女性らしさを強調するヴィクトリア的女性観からは外れていた。国内ですら、独身女性が家族も同伴しないで旅をすることは、突飛なことだと考えられた時代である。女性の意識を家庭の枠を越えて、より広い世界へと誘う WFMS-MEC の活動は、ウィリングの「神の国の為の女子教育」論に合致したものであった。⁽⁴³⁾

スカーンメーカーの日本派遣を決定したのはウィリングであった。宣教師の第一の仕事を女性の教育と伝道としたウィリングは、イリノイの女子高等教育を担った経験を持つ。すべての人間が教育の機会を得て女性も男性と同様の学問をし、迷信や無知から解放され、霊的にも新生して有用な人材となり才能を開花させることがウィリング流の「神の国の為の女子教育」であった⁽⁴⁴⁾。

青山女学院創立35周年に際し、マチルダ・スペンサーは、スカーンメーカー以来の女子教育の目的について「其品性を高め青年女子をしてキリスト教徒の麗はしい母、教師、その他の働人に」育て上げることであると語った。それを受けて棚村は、「家庭だけではない。職業を持つという女性の選択も含め、卒業生があらゆる場で、福音を伝達することを」求めるもので、「自己実現の為のキャリア教育でもなく、単なる花嫁修業でもない第三の教育」、即ち「神の国の為の女子教育」を目指し、「当時の日本の教育目標であった『お国の為の女子教育』でもなかった」として、次のように論じた⁽⁴⁵⁾。

「福音の為には、何でもする」という在り方は、女性の生き方の幅を広げた。結婚、未婚どちらの選択も余念なく主に仕える為ならば認めるという極めて聖書的な、しかしヴィクトリア的女性観を越えるフレキシブルで画期的な教育目標であった。具体的には、それは毎日の日課を通して品性の高い日本人、国際人、クリスチャン・ホームの主婦、そしてクリスチャン奉仕者を育てる教育であった。

海岸女学校から青山女学院へと続く教育目標を「神の国の為の女子教育」とするならば、確かにその射程は卒業生の多様な針路を援護するものだろう。と同時に、クリスチャン・ホームの形成と「良妻賢母」主義には明らかに親和性があることについても考慮する必要がある⁽⁴⁶⁾。「神の国の為の女子教育」が内包する「良妻賢母」主義は、本来有していたはずの女性の主体性や自立性を育む教育を拘束するものとなりかねなかったからである。

例えばその一例として、1904年以降英文学などを担当した舟橋雄の抱いた疑問を挙げることができる。舟橋は、日露戦争終結後の国家主義的な状況の中、女子教育の方針も保守的であったとして、次のように当時を回想している⁽⁴⁷⁾。

戦後の情勢の中から生まれたのが、即ち良妻賢母主義と申す女子教育の方針でした。これでは折角解放されかけた我国の婦人に、強て家庭内に逆戻りをさせるより外なき世間の有様で、せめて基督教主義を標榜する学校に於ては、何とかして、全人類を念とする広い高い理想を与へ度ものと私共は焦慮したにも拘らず、女学院の如きは、校長を始めとして、何故か日本主義とか日本趣味とかいふ事を唱へ、やはり在来の淑女風にのみ育てんとする傾向がありましたのは、私共にとっては少なからぬ心配の種でした。

舟橋は留学中に米国女性が男女平等に社会で能力を発揮していることを目撃して、「我国の婦人にもどうか十分其天分を伸す機会を与え度く、其因循姑息な状態を脱却して、広い天地に神が意図された、自由な生を享受する同胞を我周囲に見出したい」との希望を抱いていた。それ故に、良妻賢母主義教育が足かせとなることに危惧を抱いたのであろう。

「神の国の為の女子教育」、あるいは教養主義とも言い得る女子教育の理念と目的は、女性の可能性を広げ能力を伸ばし女性解放への思想的基盤を用意した側面と、女性の自由な生き方を拘束した側面と、そうした両義性を内在しつつ普遍的な教育理念として継承されていったのだと思われる。

終わりに

千代と英子の生き方は極めて対照的ではあるが、英子もまたウィリングの抱いた理念の継承者の一人といってよいだろう。英子の場合には当時の結婚適齢期にあたる17歳の時には讃美歌編纂に従事しており、その後もバイブル・ウーマンとして活動するなど、本人も周囲も英子の結婚に積極的な様子が見えてこない。英子の場合には当初から、クリスチャン・ホームの主婦ではなく、クリスチャン奉仕者として広く活躍することが期待されていた可能性がある。

当時の最高レベルの女子教育を修得し、教師としてまたバイブル・ウーマンとして熱心に活動して、貧困層の子どもの教育に意を注ぎ、さらに新聞記者として足尾鉍毒問題に全力で取り組んだ。その生き方は、何らかの事情で母の立場にいらなかったことも含めて当時の良妻賢母の規範からは外れ、日本社会の少数者としての軌跡を刻んでいる。

渡米後は、しばらく本名を捨てて井出玉子と名乗り、再婚後は大学に入学して修士号を取得し、夫と二人三脚でビジネスに成功し、最後は読書と学びに熱中する日々を送った。その後半生は新たに生き直すかのように、自分自身を軸として自由な人生を歩んだように見える。

当時の日本社会にあつては、女性であること、キリスト教徒であること、社会活動に参加することなどは、弱者・少数者としての自己を自覚する／させられる要因ともなった⁽⁴⁸⁾。社会の逆風の中で、自身を取り巻くそうした被拘束性の中で生き切った一人の人間の具体像を英子の生涯に追ってみた。

イギリス産業革命の時代に救貧運動など社会問題に熱心であったメソジスト派のミッションは日本の女子教育をも牽引した。英子は、その奉仕の精神と教育を体現し、一身の生を存分に生きた女性の一人であった。彼女のように、前人未到の境地を切り拓いていった無数の女性達の歩みの上に、私達の今がある。

【註】

- (1) 棚村恵子『しなやかに夢に生きる 青山学院の歴史を拓いた人 ドーラ・E・スーンメーカーの生涯』青山学院、2004年、118～126頁。
- (2) 青山女学院の歴史については青山さゆり会編『青山女学院史』（青山さゆり会、1973年）に詳しい。教育的意義に関する研究には、前之園幸一郎「日本の女子高等教育の歴史における青山学院女子短期大学の伝統と独自性について」（『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』2、1994年12月）、河見誠「青山女学院の女子高等教育―その歩みと基本姿勢―」（『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』17、2010年3月）、渡辺良智「ミッション・スクールの女子教育に関する一考察」（『青山学院女子短期大学紀要』62、2008年12月）などがある。さらに最新の研究である大森秀子「アメリカメソジスト派の伝道戦力と女子教育―青山女学院の場合―」（『青山学院大学教育学会紀要「教育研究」』第65号、2021年3月）によってより詳細に検討された。大森は、青山女学院エリザベス・ベンダーが「結婚への女性宣教師の介入の必要性を説いている」こと（105頁）、「文部省訓令第12号発令以降、子どもを対象とする学校伝道が後退したのに対し、母の会の活動が奨励され、結婚を前提としてクリスチャン・ホーム伝道戦略が前面に押し出された」こと、「創設以来の青山女学院の教養教育観に職業教育的要素が加えられた」こと（111頁）などを指摘した。また家政科設置に道を開いた塚本はまの役割に着目し、近代日本の女子教育の三つの型のうち第三の推進者（家庭的実科の技芸を、豊かな教養を裏づけとする科学的・合理的知性をもって処理していこうとする）として「塚本は男女同等に基づく経済的精神的に自立した妻・母という女性観を支持し」「家庭生活の合理的な生活改善を主張」したとして東京女子大学の教養主義との相違について論じている。
- (3) 英子の生涯については、府馬清『松本英子の生涯』（昭和図書出版、1981年）、永田圭介『あまつましみず―異能の改革者永井英子の生涯』（教文館、2018年）があるが、英子の一周忌に出版された永井元編纂『永井あゝ子詩文』（秀英社、1929年、非売品、復刻版：大空社、1995年刊行、以下『詩文』と記す）以上に詳しいものはない。ただし、編者が明記しているように、『詩文』は元と出会う以前の「日本時代の記事は極めて限られたる資料によって書かれたもの」で、「材料の不備不足」に加え幼少時代を熟知する人や参考すべき書類も無い中で書いたものであり、本人の話として聞き覚えていること、数人の思い出話、書類に断片的に記されたものをまとめたものである（「編纂者の言葉」『詩文』8頁）。そのため、年月日など間違いが散見される（これに依拠したとみられる府馬、永田前掲書にも同様の間違いがある）。英子に関する資料は乏しく、唯一の典拠といえる『詩文』の誤りを全て正確に訂正することは不可能に近く、本稿でもこれに依拠して記述するしかなかった。
- (4) 『詩文』17～18頁。
- (5) 『詩文』18～19頁。

- (6) 棚村前掲書、180頁。
- (7) 『詩文』 25頁。
- (8) 英子を若い時から知るメソジスト教会教育部のドクトル・ミルトン・エス・ヴェール博士の証言として記載されたものである（『詩文』 21頁）。
- (9) 『詩文』 219頁。以下『詩文』の「ゑい子女子と日本の讃美歌」215～256頁、21～24頁に依拠して記述した。英子と讃美歌に関しては戸田義雄・永藤武編著『日本人と讃美歌』（桜楓社、1978年）、手代木俊一『日本プロテスタント讃美歌・聖歌史事典 明治篇』（港の人、2008年、92～103頁、105～111頁）参照。また、『青山女学院史』47～49頁には英子の伝道奉仕に関する記載があり、「日本の讃美歌に貢献した人々の事蹟を」「日本メソジスト時報に連載した」別所梅之助の遺稿をまとめた『桃陰想旧溪』（1961年）に戸川残花、岩野泡鳴などと共に英子について記されていると紹介し全文を転載している。
- (10) 『詩文』 23頁。
- (11) 同前、234頁。
- (12) 同前、239～240頁。
- (13) 同前、241～244頁。
- (14) 家永は熊本バンドのメンバーで、英子の同窓生米良米の夫である元良勇次郎と共著『萬国史綱』（上下、三省堂、1892～93年）を出版し、共にアメリカのジョンズ・ホプキンス大学でPh.D.を取得していた。離婚の理由は「婚家破産」とされているが、家永は離婚の前後に慶応義塾大学部教授を辞職し外務省勤務となっており説得力に欠ける。離婚後、英子が勝之助を養育できなかったことなどを含め離婚については不明な点が多い。家永に関しては太田雅夫編著・監訳『家永豊吉と明治憲政史論』（新泉社、1996年）など参照。
- (15) 『詩文』 30～31頁。
- (16) 同前、33頁。
- (17) 棚村前掲書、177頁。
- (18) 『詩文』 34～35頁。『婦人新報』（第52号、1901年8月25日、9～23頁）には『時事新報』の記事が転載され慈善旅行について詳細に報告されている。
- (19) 『詩文』 199～201頁。
- (20) 新聞記者としての英子に関する先行研究としては、井手文子「足尾鉍毒問題と女性」（『田中正造とその時代』VOL.3、1982年）、江刺昭子「鉍毒と闘った社会派—松本英子」『女のくせに 草分けの女性新聞記者たち』インパクト出版会、1997年（文化出版局、1985年の増補新版）、竹見智恵子「松本英子・鉍毒地の惨状」あとさき」（『田中正造の世界』No2、谷中村出版社、1985年）、竹見智恵子「足尾鉍毒事件の中のおんなたち」（奥田暁子編『マイノリティとしての女性史』三一書房、1997年）、土屋礼子ほか編「木下尚江・松本英子」（『近代日本メディア人物誌 ジャーナリスト編』ミネルヴァ書房、2018年）、在米時代に書かれた非戦論の研究には本沢二郎「非戦運動の先駆者・松本英子」（『軍縮問題資料』No211、1998年5月）などがある。本稿では割愛せざるを得なかったが、英子と矯風会など女性達の鉍毒被害救援活動については改めて別稿で論じたい。
- (21) この他、『詩文』 36～39頁には、鉍毒事件に尽力した記者時代の英子に関する永島の思い出が記載されている。
- (22) 渡米以降については「米国時代のゑい子（上）」（『詩文』 259～315頁）、「米国時代のゑい子（下）」（同前、637～700頁）に詳しく記載されている。

- (23) 藤野雅己「『金門日報』創刊者永井元と松本英子」(『田中正造の世界』No2、1984年、谷中村出版社) 参照。
- (24) 例えば、1917年(大正6年)に設置された内閣の諮問機関である臨時教育会議の審議でも委員の多くは女子高等教育に否定的で、翌1918年の答申では高等女学校に高等科を設けることは認めても女子のための大学制度の設置は時期尚早と結論したのである(海後宗臣編『臨時教育会議の研究』東京大学出版会、1960年、739頁)。
- (25) 棚村前掲書、138～139頁。生徒の信仰と両親との軋轢は以後も続く問題であり、宣教師にとっても試練の一つであった。
- (26) 同前、141頁。
- (27) 同前、142～145頁。
- (28) 同前、169頁。
- (29) 同前、171～172頁。
- (30) 栗屋栄子「想ひ出」『青山女学院校友会会報』第38号、昭和9年、98～99頁。
- (31) 以下田村の旧懐談は『詩文』14～17頁より引用。
- (32) 『詩文』19～20頁。高津は九州小倉藩士の家に生まれ、8歳で僧籍に入った人物で、僧籍にありながら津田仙の創立した訓盲院、女子学院、救世学校、海岸女学校など広く教育事業にたずさわった(『青山女学院史』73頁)。
- (33) 『女学院史』124～125頁。
- (34) 棚村前掲書、172頁。
- (35) 同(31) 田村談、『詩文』14～15頁。
- (36) 棚村前掲書、173頁。「ミス、スクウムメーカー(二)」(『護教』第326号、1897年10月23日、7頁)には「試験の公開」について「一年一回の大試験あれば、必ず公開して、来賓の前に生徒を試験せり、慶應義塾其他の人々の招かれて試験場に来るを常とせり、これ嬢の自信の厚かりしを見るべきなり」と記されている。
- (37) 齋藤元子「海岸女学校―青山学院の源流―」築地居留地研究会編『近代文化の原点―築地居留地』Vol.3、2004年、97頁。同論文では教授内容や教師などについて詳しく分析されている。
- (38) 同前、99～101頁。
- (39) 棚村前掲書、181～182頁。
- (40) 岩村清四郎『金婚』(1931年、非売品)47頁、50～59頁。同書によれば千代と小崎の結婚は津田仙が仲介し、英子も一役買っていた。またミッション・スクールの女性宣教師による日本人の結婚への介入については小檜山ルイの一連の研究に詳しい。例えば「北米出自の女性宣教師による女子教育と『ホーム』の実現」(キリスト教史学会『近代日本のキリスト教と女子教育』教文館、2016年)参照。
- (41) 棚村前掲書、284～285頁。
- (42) 同前、74～75頁。
- (43) 同前、75頁。
- (44) 同前、75頁。
- (45) 同前、182～183頁。
- (46) 例えば奥田暁子は、女子教育の発達に先駆的役割を果たしたといった定説を批判的に検討し「ミッションスクールが良妻賢母イデオロギーの浸透に果たした役割は意外に大き

かった」としている（「ミッシヨンスクールに女たちの求めたもの」『思想の科学』1994年9月号、60～71頁）。また、小檜山前掲論文参照。

- (47) 『青山女学院校友会会報』第30号、1925年7月、42頁。舟橋は1904年から英文学・英文法・西洋美術を担当した（大森前掲論文、106頁参照）。
- (48) 棚村は、日本の家族制度がアメリカ型の家族と異なり女性は妻・母であるとともに嫁であり「日本的敬虔を求められる」こと、祖母が明治のクリスチャンであったことを踏まえて卒業生たちが直面したであろう困難について論究し、「イエの嫁となったほとんどの卒業生たちは、自らのキリスト教信仰や、学校で教えられた価値観と実践をどう保持したのであろうか。婚家の先祖崇拝や地域の信仰と自分の精神世界の間で、どう折り合いをつけたのだろうか」と述べ、卒業生は「他の日本人女性が味わわない葛藤を強いられたのではないだろうか、その点の認識が、WFMS-MEC 及び独身宣教師たちにどれほどあったか、私は疑問に思う」と指摘している（棚村前掲書、184～186頁）。棚村の祖母は嫁として仏壇を守りながら教会に通い子供たちを教会付属の幼稚園に通わせキリスト教の感化を与えたが「家族全体をキリスト教徒にすることはできなかった」とされる。「その意味では、女性に伝道すれば日本を変えられると考えた宣教師たちの思惑は、必ずしも成功したとは言えない」ということなのだが、私は家族の中で一人信者であったというその信仰の強さにも関心がある。そうしたことも含めて、卒業生のその後について考えていきたい。

A Study on Women's Education and Christianity in the Early History of Aoyama-Gakuin Focus on the graduate Eiko Matsumoto of Kaigan-Jo-Gakkō as a New Type of Woman

Mizuno KOBAYASHI

This article focuses on the life of Eiko Matsumoto (Eiko Nagai), who studied at the Kaigan-Jo-Gakkō (a forerunner of Aoyama-Gakuin), which was established by the American female missionary Dora E. Schoonmaker in 1876 (Meiji 9). It considers the significance of today's Gender Studies.

Eiko Matsumoto acquired the highest level of women's education at the time, worked diligently as a teacher and a Christian worker and devoted herself to volunteer work. As a newspaper reporter, she focused on the Ashio Copper Mine poisoning problem and insisted on non-war and peace until her later years. She continued her life as a member of a minority group.

The educational content of Kaigan-Jo-Gakkō, which formed the foundation of her worldview, was at a high level comparable to that of boys' education, and modeled on the female seminary. The purpose of Christian women's education from Kaigan-Jo-Gakkō to Aoyama-Jo-Gakuin was to train dignified Christian housewives, teachers, and Christian workers.

This educational philosophy had the ambiguity of drawing out the potential and abilities of women and becoming the basis for women's liberation, and in contrast, restraining women's freedom to the home. It can be considered as an inherited educational principle of liberal arts.

In Japanese society of that time, in which male chauvinism was prevalent, women, Christians, and newspaper reporters, all aiming to solve social problems, were exposed to adverse winds. The life of Eiko Matsumoto, who lived in such a restrained environment, is a different way of life from the Good Wife, Wise Mother type. She learned from Women's education driven by Methodist missions, and while she embodied a spirit of service and education, she was one of the women who lived her life to the fullest.

Keywords: Women's Education, Christianity, Mission School, Good wife, Wise mother,
Eiko Matsumoto Eiko Nagai, Dora Schoonmaker, Aoyama Gakuin, Aoyama-Jo-Gakuin
